

## な か ま

発行  
佐倉市立中央公民館  
編集  
な か ま 編 集 委 員 会  
〒285-0025  
佐倉市鐺木町 198-3  
電話 (043)485-1801

里山で見かけたもの ----- 安 保 昌 浩 断捨離の成果 ----- 都 築 洋 子  
年寄りの感傷 ----- 塚 原 謙 二 節目の年 ----- 鈴 木 正 記

## 吾輩はひよどり (続編)

田村孝則

近所の人たちの間で吾輩の前作(平成22年10月号)が話題となり、そのひよどりに一目会いたいと大人気となった。鳥ながらちよつと気を良くした吾輩は続編を書くことにした。

主人は一昨年、金もないのにさつさと勤めを辞して悠々自適の生活に入った。市民講座なるものを週に数回受講し、勉強する振りをしているが、何を学んでいるのか、何に役立っているのかとわからない。

案の定、同学と思しき女子から電話が掛つてきたり、打合せだ、飲み会だと称して夕方ココソコ出かけたりので奥様は怪しんでいると思きや、「主人のような無精者に限って女に好かれたためしがない」と高を括っている。現在連れ添う細君にさえあまり珍

重されていない主人が、世間一般の淑女に可愛がられようはずがないと吾輩も思う。何も異性間に不人望な主人をこの際ことさら世間に暴露する必要もないのだが、本人においてには存外な考え違いをしているようであるから、自覚の一助にもなるうかとちよつと申し添えるまでである。

主人は退職記念に部下からもらった端溪の硯に甚く感激し、奈良の墨、熊野の筆に加えて王羲之の拓本まで揃えたが、何故か引き出しの中で眠らせている。古いギターを修理に出し、これから始めるのかと思えばこれまた部屋の隅で埃を被っている。昨春突然始めた中国語も、秋の声を聞くころにはあの傍惑な四声はとうに止み、家の中はすっかり静かになった。主人の気持ちは吾輩の頭のように間

断なく動いて定まることがない。何をやっても長もちのしない男である。

元来主人の服装は放つておくとしも正月も、普段着もよそいきもない。全ては奥様が日々指示する。日に幾度となく外着と内着を着替えさせられてはいる様を、ドアの上から面白可笑しく見物するのが吾輩の楽しみとなった。鳥のように一年中羽毛単衣で過ごせというのはちと無理かもしれんが、筆筒の肥やしになるほどの衣装や山ほどの家財を持ち歩く人間様を気の毒に思う。

羽毛と言えば、吾輩の羽の彩色はお世辞にも美しいとは言えない。しかし白と灰色の混じった胸毛はベルベットの如くきめ細かく滑らかで、奥様はいつも吾輩の胸元をやさしく撫でてくれる。多少迷惑ではあるが、食客の身でありこの位は我慢している。

ここで用紙が尽きた。今日はこの位で羽根ペンを置く。

(編集委員)

## 里山で見かけたもの

豊かな自然が残っている佐倉の里山や谷津田を歩きまわっているとき色々な物に出会います。畔田上空では「オオタカ」「ノスリ」が飛翔し、手繰川、高崎川の橋の袂では寶石のような「カワセミ」が機敏に飛び回っています。印西市には「オオハクチョウ」「コハクチョウ」が、遠くシベリヤからやってきます。野原では「ヒバリ」が天高くさえずり、「キジ」が鮮やかな衣装で突然現れます。キリキリと鳴く「モズ」は長い尾を神経質に動かし、赤褐色の「ジヨウビタキ」もせわしなく動いています。キツツキの「コゲラ」は幹をくちばしでリズムよく叩いて虫を捜しています。

は黒い小さな実がネズミの糞の様です。「コブシ」は実が赤ちゃんの手に似ています。「ブタナ」は美しい黄色い花なのに可哀そう。「サルトリイバラ」は猿も引つかかる堅いトゲを持っています。赤い実がつく「マムシグサ」の花は蛇が鎌首をもたげた様です。人名のような「タカサブロウ」は、可憐な黄色い小さな花をさかせます。「イノコズチ」は茎の節目が猪の子（瓜坊）みたいです。「カラスノエンドウ」はカラスのように大きなエンドウで、小さいのは「スズメノエンドウ」です。「タイアザミ」は痛いアザミから来ているそうです。里山、谷津田に生息する可愛らしい野鳥や草木の観察は、心のいやしと体力作りにはもってこいです。皆さんも佐倉の自然をご一緒に楽しんでみませんか。

（井野 安保昌浩）

## 断捨離の成果

以前、この欄に、灰谷さんの断捨離に関する文章が掲載され、読ませていただいた。その後、同名の本を娘がプレゼントしてくれ、「主語は私」に共感し、もつたいないは美德と信じていたが、度を越すと、いつの間にか、まるで主の如く、物が場所を占拠し、夫と私は従者みたいに、狭い所に遠慮がちに暮らしているような、滑稽且つ、本末転倒な状態であると分かったから、部屋を片付けた。箆笥にぎゅうぎゅう詰めの洋服、部屋に積み重ねてある雑多な物に辟易していたが、捨てることに抵抗があり、悶々としたまま年月が流れていた。同じ気持ちだった夫も賛同し、自分の服の仕分けをする等、協力してくれた。又、お互いに励まし合い（やはり、処分することに罪悪感があるのだ）目的を達成することが

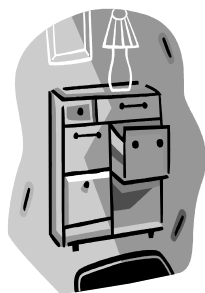
出来、居心地のいい和室に変わった。洋服の出し入れも、掃除も楽になった。

空いたスペースに、通販で購入した自分専用の、小さな机を置いた。趣味のパズルをし、手紙を書く。一人でお茶を飲むこともある。至福の時だ。

今回、処分した物（洋服も）が多かったのでおどろいた。これからは、慎重に選ばなければいけない。衝動買いはしない。それが物と、作つた人に対する礼儀だろう。

良寛は、五合庵に独居の時、米三升と、薪一束と、粗衣があればいいと詠んでいる。私は、とてもそういう心境になれないが、彼の精神の美しさに合掌したくなる。

（白銀 都築洋子）



## 年寄りの感傷

朝暗いうちから通勤電車に乗り夜遅く帰宅する毎日の現役時代には、よその子供さんを見て別段の感情が湧いた覚えが無い。心の余裕が無かつたのだろう。

自由の身となり絶滅危惧種の年代になってこれがかんり変わった。小さい子供たちを見ると「可愛い人形に神様が命を吹き込み動かしている」ようで奇跡としか思えないのだ。

妙齢の女性を見ると「なるべく早く、明るくしつかりした男性を見つけて幸せになつて欲しい」と願ってしまう。

老夫婦を見ると「双体道祖神のようにいつまでも二人で寄りそって仲良く生きていつて欲しい」などと思ってしまう。「片一方が早めに去るよくな残酷なことをするなよ」などと激励の音が腹の中であってしまふ。

子供の寝小便の始末や娘の結婚費用の工面や寝たきり老人の世話などをしない第三者的な無責任な立場にいるから呑気に構えていられるのか。其れもあるかも知れないが別の要素もあるかも。

現役時代の激務、不条理、雑念、責任など世俗の重しが肩から抜けて、今まで体内に潜んでいた「種族が永遠に続き栄えるよう」にこのDNAが心の表面まで浮き上がってきたのかなとも思う。

ところで、十五分のお化粧でアナグマからソフィアローレンに瞬間変身する我が愛する老妻だが、私がいなくなるといういろいろ困った状況に置かれてしまふのではと私は心配している。私も心身ともに健康を長持ちさせなければと思つてささやかな努力中です。

(大蛇町 塚原謙二)



## 節目の年

定年退職後、誘われるままに町内会活動に活路を見出しました。年4回の親睦会での近所の人との酒宴が最大の楽しみでした。酒は百薬の長であり、仲間との信頼を築く絆です。この絆は災害時に最大の効果を発揮します。皆さん

は「文武両道」と言う言葉は人口に膾炙<sup>かひしや</sup>している為ご存知だと思えます。中国の詩人杜甫は詩の先達李白を評し「飲中八仙の歌」の中で「李白一斗詩百篇」とよんでいます。彼は飲む程に酔う程に、自然に詩を口ずさんだと言われています。まさに「文酒両道」の人だったのでですね。

話は変わりますが、皇室関係のニュースで天皇皇后両陛下が介護施設「横浜市高田地域ケアプラザ」を昨年9月21日に見学された事を知り、当施設での社会福祉協議会の外部研修を企画しました。研

修に際し、有名な日本庭園「三溪園」を訪ね、近くの中華街で食事をするコースを設定しました。当初の申込が10名増えた為食事予約の追加や先方への人員増加のお知らせに当惑しました。

特筆すべきは、93歳の高齢者が現役としてボランティア活動に励んでいる事が両陛下の耳に入り、来館を決意されたのかもしれない。館内は温かい空気に包まれたそうです。

横浜市は居住区近辺の「社会福祉施設」に公民館としての機能を持たせる他に、奉仕活動をした高齢者にポイントを付与し、換金や寄付が出来る先進的制度を取り入れて社会参加を促した結果、ボランティア活動登録者は5千人を越えました。我々に「楽しさ、喜び、生きがい」を与え、そこに存在意義を見つけ出させています。日本の将来への道標の様な気がしてなりません。

(鍋山町 鈴木正記)

## 4月の黒板

# 『なかま』の原稿を募集しています！

『なかま』の2ページと3ページは佐倉市民の皆さんから投稿いた

だいた記事を掲載しております。

『なかま』の原稿は、自由テーマを原則としています。「出会いと別れ」、「旅の思い出」、「祭り」、「私のふるさと」、「私の健康法」など何でも構いません。また、日常での出来事で発見したこと、気付いたこと、経験や感想などもご随意にお書きください。

原稿の字数は、650字（13字×50行）以内です。また、掲載するにあたり常用漢字への変更、句読点等の修正や語句の訂正をさせていただくことがあります。

問い合わせ先

佐倉市立中央公民館 TEL 043 - 485 - 1801

〒285 - 0025 佐倉市錦木町198 - 3

### さくら道

東京港区にある迎賓館は外国の要人を迎える特別な施設ですが、前身は明治時代、紀州徳川家の屋敷跡に建てられた赤坂離宮。大正天皇が皇太子のとき東宮御所に使われま

した。  
イギリスのバッキンガム宮殿やフランスのヴェルサイユ宮殿を思わせるようなこの建物が戦後間もなく国立国会図書館の仮館として一般に公開されたことがあります。

床には絨毯が敷かれ壁画のある天井からシャンデリアが

吊るされた豪華な部屋が閲覧室に使われていましたが、入館には長い行列ができることもありました。

通称、上野図書館で親しまれていた帝国図書館が名称変更し国会議事堂に隣接する現在地に新館ができるまでの間でしたが、思い出の図書館の一つです。なお、今月三十日は図書館記念日です。

（金井義彰）

### あとがき



二月十八日に、市民カレッジを卒業しました。卒業前の全員に課される宿題に、卒業文集があります。どんなに書くことが嫌いと言う人も通らなければいけない最後の関門です。

『なかま』への執筆依頼をしても中々書いて下さらなかつた方が、出来上がったこの卒業記念誌ではとても良い文章を書いています。書いた後

の感想を聞いてみたら「卒業までの四年間を振り返り、卒業後の活動について考える良い機会であった。又、漠然と考えていた事が、明瞭になった」と言っていました。

携帯電話、電子メールの時代で、ペンをとって原稿の目を埋める事は少なくなってきましたが、頭の整理や、旅の思い出、故郷、旧友の事やふと感じた事等を綴ったら良いのではないのでしょうか。

（横山詔正）